

下水道としても——3

「もういいのに、まーだだよ」

最近の子ども達は「おいかげごっこ」「鬼ごっこ」「かくれんぼ」などはやっているのでしょうか？このほか「缶けり」とか「水雷艦長」とか。懐かしいな～、あの頃の子供達は、なんだかやたら駆け回っていましたね。まだ東京に広っぱが、ふんだんに残っていた昭和20～30年頃の話です。

「もういいかい？まーだだよ」は、「隠れん坊」遊びの掛け声。目隠しをしていた鬼が「全員ちゃんと隠れたかな、もう（捜しても）いいかい？」と叫ぶと、他の子らが隠れた処から「もういいよ」と返事をします。なんともいえないノンビリ感。こんな「子供らしい遊び」は今の子供はもうしないのかな？

現実に戻って。「もういいのに、まーだだよ」は、お茶の水駅のトイレにほうほうの体で駆け込んだ私が、準備はできた「もういいよ」と自身に言っているところ。

あれだけ我慢して耐えたのだから、きっと気持ちのよい排尿が大量にある筈。あれれ？？なかなか出てこないな～。焦る。若い人たちが、次々に用を足して去っていく。わたしは動けない。「したい」けれど「でない」のだから。「準備はもういいのに、まーだ（出てこないの）だよ」。

それまでは、時間のかかる老人を尻目に、さっそうと用を済ませて、出ていくのが私だった。家で父親と同居するようになった50才ころ、80才の父親とトイレがぶつかることが多くなり、オヤジのおしっこがえらく時間がかかる、ことに気がついた。

最近きいたハナシによると、新聞記者のOB達がよく利用する記者クラブのトイレは日本一穢いと。時間がかかる上に、雫を残してゆく。

こうした男性の老化現象は「前立腺肥大」で説明されることが多い。つい先日も同年輩の知人が「尿閉」の状態になり、大慌てで病院を受診したと聞きました。まあこの年齢になるまで「下水道の不具合」を知らなかった彼は幸せというべきでしょう。

前立腺が加齢とともに大きくなって、尿道や膀胱を圧迫するのが前立腺肥大症です。

皆さんが恐れているのは前立腺のガン。ご承知でしょうが、前立腺ガンの腫瘍マーカーPSAはたいへん敏感に検出されるので、この検査が開発されてから、前立腺ガンと宣告される患者さんが一挙に増えました。もともと放置しておいても発症には至らないことが多い前立腺ガンなのですが、PSAマーカーが用いられるようになってから、前立腺ガンの早期発見！と宣告して、加療をし、生存率が上がった、万歳、という、まったく医者都合だけで、患者さんたちがいい迷惑を被ることが繰り返されています。早期胃ガンも同様で、

ほっといても生涯命取りになるガンに成長することはないのではないか、という視点が欠けています。

よしなしごとが頭に浮かんで消え・・・まだ出ないの？

う～ん。前立腺の大きさと症状の程度は、必ずしも比例しない。前立腺の肥大が進んでいるのに、自覚症状の無い人も多い。そうすると、前立腺肥大だの、前立腺ガンでこの排尿異常を説明するのはムリ。我慢をかさねて緊張を強いられてオチンチンは「交感神経」優位になってすっかり縮こまっている。ホッとして気持ちよく大量の尿がでてくるのは、緩んだ気分「〈副〉交感神経」優位でないと。その切り替えに手間取る、というのが老化の正体ではないか？ アクセルとブレーキの混乱といってもよい。

我慢に我慢をかさねて交感神経がすごく働いているときに、急に、さあどうぞ、と言われても〈副〉交感神経が都合良く反応してくれない。こういう「ゴー」か「ストップ」で身体の機能を説明するのは、まさに東洋医学の「陰陽論」と似ています。人間のような総合的な有機体であるイキモノには、陰陽論みたいなザックリした論理で説明する方がいいことが多い・・・まだ出ないの？？

ちよろちよろとようやく出始めました。ああよかった。あれれ、たったこれでおしまい？？「どっと出る」までに至らないでもう終わり？

ちっともホッとしなないし、「きもちいい」がないよ。

釈然としないまま、オチンチンをしまつてすごすご退出。そうです、尿意の鋭さと、排尿の量とは比例しない。これが若いときには絶対わからなかった、大人の熟年の真実！！

いやいや、大分手間取ってしまった。おそらく10人くらいの若者が、このおっさん長いなー、と追い越して行っただろう。

この事件を期に、私は覚悟をしなくてはならなくなった。肉体的衰えは誤魔化せない。「若いつもり」はもうナシなんだよ。

60才を目前にすっかり老人の仲間入り。正確には、主観はどうあれ間違いなく「老人的身体」になってしまった、ということはこの事件は教えてくれた。

まだまだ精神的には若いと思うのはいいけれど、「熟年」なぞとコトバを替えるのも勝手だが、心身ともに「老人の掟」のイニシエーションが済んだ、という感じ。若さという衣を身ぐるみ剥がされてもってゆかれた、という感じ。

——以下次号——

タイチーセンス・56

～上達とは変化すること～

太極拳が上達するとは、どういうことだろう？

套路(太極拳の型)の順番や技の動きが出来るようになったからと言って、太極拳が上達した事にはならない。肉体的に筋力や柔軟性が増す事でもない。これらは太極拳が上達するための準備に過ぎない。そして、これらが十分だったとしても必ずしも上達して行くとは限らない。

なぜなら太極拳の上達とは変化することだからだ。変化とは単に量や数が増えて行く事ではない。

人の成長で言うと、赤ちゃんが単に大きくなったのが子どもではなく、子供が単に大きくなったのが大人ではないということだ。ここでいう大人と子供と言うのは法的な区別ではない。赤ちゃんは自分で食べることも立つことも歩くことも出来ない。時間が経てば自然に出来る訳でもない。身体も単にサイズが小さいだけではなく、頭が大きく、胴に対して手足が短い。

子供は外見上は小さな大人に見える。しかし生理的な機能が違う。赤ちゃんから子供、大人へと明らかに変化しているのだ。

この変化を成長と呼ぶなら、大人になってからは人はもう成長しない。残された成長は精神面からの、人間的成長だろう。勿論、大人になってからも青年期は身長も伸びるし体力も増す。精神的にも知識や経験は増えて行く。

しかし、それらが増したからと言って人間的に成長したとは言えない。変化と言う意味では社会的な地位や立場は変わるかもしれない。しかしそれらは、周りの環境や人の見方が変わったのであって、自分自身が本当に変わったのではない。本当に人間的に成長するということは、すでに自分に在るものが増したり、自分を取り巻く環境が変わる事ではなく、自分自身が精神的に変化して成長することだろう。

この人間の成長を太極拳の上達と置き換えれば、そのまま当てはまる。だから単に学習時間や練習量を増やしたり、長い年数続けたからといって上達するとは限らない。資格や検定に合格したり、大会で入賞しても必ずしも太極拳の上達した結果とは限らない。

肉体的、生理的、精神的に、量ではなく質的な変化があって、はじめて太極拳の上達といえるのだ。(今月号から「太極拳的感性」と表題を変更)

